



インタビュー

# Interview

天草アーカイブズの設立から、その後の運営にも携わっておられる学習院大学の安藤正人教授が、7月29日から8月3日にかけて行われた天草アーカイブズ主催の「夏期史料調査事業」に参加されましたので、話をお聞きしました。

学習院大学  
安藤正人教授

愛媛県今治市生まれ。東京大学大学院・ロンドン大学大学院修了。国文学研究資料館アーカイブズ研究系教授・総合研究大学院大学教授をへて、現職。平成14年4月から同22年8月まで、天草アーカイブズ運営審議会会長。



しむことができたり、当時は何が起きていたかを知ることができたりすることです。私は神奈川県茅ヶ崎市に住んでいますが、そこは古い村を開発してニュータウンをつくったところなんです。開発前の姿や当時の人々の暮らしぶりなどは、天草アーカイブズと同じような施設である藤沢市文書館で見ることが出来ます。

市民の皆さんにとって『情報の宝庫』  
——天草アーカイブズを設立するきっかけは、安藤教授の一言だったそうですね。

もともと、天草へは昭和54年に歴史研究のために訪れたのが最初で、その後も、毎年天草を訪れて史料調査を行っていました。そんな中、平成12年に日本渡市の安田市長にお会いする機会があって、そのときに「公文書を整理するの

はいいですけれども、古い記録はきちつと評価して、大切にとっておかなければいけないですよ」とアドバイスをしたんです。

というのも、当時日本渡市では、情報公開制度の導入にあたって保存期間を過ぎた公文書は、一斉に廃棄するということがあったんです。それを聞いて、「これはいけないな」と思いアドバイスを申し上げたわけです。

——市民にとって、天草アーカイブズの利用目的としてはどんなものが考えられますか。

まず、市民の皆さん一人ひとりにとっては、地域史料をご覧いただくことで、昔を振り返って懐か

これをきっかけに安田市長が方針転換をなされて、その後は関係者の皆さんのご努力があって、平成14年4月に天草アーカイブズが設置される運びとなりました。

たとえば、本渡地区の船之尾町から大浜町を通る市道（通称・まゆ姫通り）で行われている「まゆ姫通り『女の夜祭り』」。これは、かつてこの場所にあった藪市場にまつられていた女神にちなんで開かれているものですが、同祭りの開催にあたっては、天草アーカイブズが史料や文献の調査に協力したと聞いています。

地域の皆さんのご尽力があったり、現在は多くの人出でにぎわいを見せているということ、すばらしい事例のひとつだと思っています。

## 夏期史料調査事業

安藤教授をはじめ全国から専門家のほか、地元ボランティアなど22人が参加。今回は、江戸時代の大庄屋である松浦家（天草町大江）に伝わる屏風のほか、同時代に庄屋の筆者（書記）を務めていた御崎家（河浦町河浦）に伝わる古文書の調査が行われました。



▲松浦家に伝わる屏風



▲御崎家に伝わる古文書



▲参加者の皆さん



▲古文書の目録を作成



▲屏風をはがすと古文書が

## 行政自身が積極的に

### 活用することが大事

——行政の役割としてはどのようなものがあるのでしょうか。

昨年4月に、公文書などの適切な保存・活用について定めた「公文書等の管理に関する法律」が施行され、公文書などの管理に向けて全国の自治体の動きが活発になってきています。

このような中、天草アーカイブズの3つの基本理念のひとつに「情報資源を活かした高度な行政の実現」があります。より多くの市民の皆さんに天草アーカイブズを利用してもらうことも重要ですが、この理念を達成するために、

行政自身が過去の公文書などをいかしながら、市民の皆さんに積極的に情報を公表していくことが必要だと思います。

たとえば、災害の問題。昔起こった災害に対して、当時どのような対策をとったのかを知ることがとても重要です。そして、そのときの反省点や課題などは、必ず今後の防災対策に役立つはずです。

このような市民にとって有益な情報は広く提供していくべきだと思いますし、これは行政の役割というよりは、むしろ責務だと思っています。

## インタビューを終えて…

30年以上にわたり、毎年天草を訪れている安藤教授。その理由について尋ねると、「土地が好きだからというのはもちろんですが」としたうえで、「天草は、中世から近代にかけて、ポルトガルや東南アジアなど海外とのつながりが深く、国内でもいろいろなつながりを見つけることができます。歴史研究のタネが見つかることがない、魅力にあふれた場所なんです」と話す。そして、「皆さんには、天草が歴史資源に恵まれた土地だと再認識してもらいたいですし、これらをもっと活用してほしい」と語ってくれた。